サルトルとイタリア（1）

澤　田　　直

はじめに

ジャン＝ポール・サルトルが，第二次世界大戦後，従来の枠組みを大きく超えて，哲学者，作家としてのみならず，文学・美術批評家，さらには政治参加の知識人として，領域横断的な著作活動を展開していった背景には，彼の外国への長期滞在体験が大きく関わっていると考えられる．その体験とは，とりわけ 1945 年，46 年のアメリカ滞在であるが，定期的に訪れることになるイタリアも同じくらい重要な契機となっているのではなかろうか．イタリアの影響とは，一方で，芸術や文明事象一般への理解の深化であるが，もう一方でイタリア共産党に象徴されるイタリアの政治状況の特異性に触発された政治的領域での新たな思想展開である．それにもかかわらず，このイタリア体験の重要性についてはこれまで，少なくとも，日本のサルトル研究においては，主題的な仕方では問われてこなかった[1)]．

本稿は，この重大な欠落を埋めるべく，イタリアの文化や知識人との交流によって，サルトルの著作活動が領域を超えてどのように展開したのか，また外部との接触がフランス実存思想に何をもたらしたのかを検討するための予備作業である．サルトルの伝記的事実と著作に展開される思想とを照らし合わせ，歴史的文脈のうちで詳細に検討することで，サルトルの思想および作品と，彼のイタリア体験との関係を明らかにすることが最終目的であるが，ここではその第一段階として，事実関係および問題構成を整理することにしたい[2)]．

「サルトルとイタリア」という主題は，フランス文学研究に伝統的に見られる「ミュッセとイタリア」「モーリス・バレスとイタリア」「プルーストとイタリア」「ミシェル・ビュトールとイタリア」といった，作家たちのイタリア体験とは一線を画すものである．じっさい，西洋文明の揺籃である地を訪れるという教養旅行，いわばグランド・ツアー的なものにとど

まらず，より深くイタリア人たちとの交流にウエイトがあった点に，サルトルとイタリアの関係の特徴がある[3]．その意味で，しいて言えば，サルトルの最愛の作家スタンダールのイタリア体験がそれに近いかもしれないが，ここでは他の作家との比較に入ることはしない．

サルトルは生涯にわたってきわめて多くの旅行を行った作家であるが，1933年夏に初めて旅して以来，イタリアの隅々まで踏破したのみならず，ある時期から夏の休暇を定期的にローマで過ごすことになった．このことからも，イタリアはきわめて特権的な意味を持つ．サルトルのイタリアとの関わりを，時系列を追いつつ，確認することから始めることにしよう．イタリアとの関わりは，その内容から見ておそらく4つほどの時期に分けて考察することができるだろう．あくまで便宜的にではあるが，「第二次大戦以前」（1933–39年），「第二次大戦直後」（1946–52年），「政治的時期」（1953–69年），「晩年」（1970–79年）と区切ってみることにしよう．

1　イタリア滞在の意義の変遷

1.1　第1期（1933–39年）　戦前の教養旅行

『嘔吐』の主人公アントワーヌ・ロカンタンが世界中を旅したという想定には遠く及ばないとしても，青年期のサルトルも，教員としての長い夏期休暇を利用して，様々な場所を訪れていた．1930年に他界した祖母から受け取った10万フランほどの遺産を元手に，ボーヴォワールと二人で1931年夏に訪れたスペインを皮切りに，翌32年の夏には，スペイン領モロッコとスペインを旅行，1933年春にはロンドンを訪れた．そんなサルトルとボーヴォワールが最初にイタリアの地を踏んだのが1933年夏のことだった．

まだ学生気分の抜けない二人は，若さに溢れる貧乏旅行を敢行する．最後に訪れたミラノでは路銀が払底して，食事もままならず，予定を切り上げて帰国するのだが，彼らがイタリアに圧倒されたことは，ボーヴォワールの回想からも窺える．

> 数々の醜いものを含んでいるスペインと違って，イタリアでは一塊の石壁といえども日を感じさせずにはおかない．私はいっぺんにその虜になった．
>
> （FA178／『女ざかり』上142）

ムッソリーニ治下のイタリアで，サルトルは黒シャツのファシストたち

の存在に大いに苛立ったとも，ボーヴォワールは付け加えてはいるが[4]，二人の旅行が，ある意味でグランド・ツアーにも似た，若き知識人の教養旅行であったことは，旅行の仕方から見てとれる．重要な絵画や建築を自分の眼で確かめ，名所旧跡を中心に訪れているからである．

二人は列車で，ピサを皮切りに，中部イタリアの珠玉のような街々を訪れた後，フィレンツェで二週間を過ごす．つづいて訪れたローマは，次の機会にゆっくり見ようと考え，四日間だけで我慢しながらも，フォロ・ロマーノをはじめとする遺跡を散策する．その後，オルヴィエトでルッカ・シノレッリの壁画を鑑賞し，ボローニャで数時間を過す．だが，イタリアの都市のなかで，最も鮮烈な印象を受けたのは，ヴェネツィアだった．「私たちはけっして二度と持つことのできない眼，つまり初めて見る者の眼でヴェネツィアを眺めた」（FA179／『女ざかり』上 143）とボーヴォワールは述べているが，サルトルが，スクオーラ・ディ・サンロッコでティントレットの「キリストの磔刑」を見て，この画家に心酔することになったのも，このヴェネツィア滞在の時である[5]．後に見るように，ティントレットは，サルトルが生涯にわたって関心を寄せた特別な画家となり，未完に終わったとはいえ，多くの原稿が書かれることになる．

かくして，この旅行こそ，サルトルとイタリアの長く深い交流の端初となるわけだが，当初イタリアは，あくまでも多数ある行き先のひとつでしかなかった．この年の 9 月から一年間，サルトルは現象学研究のためにベルリンのフランス学院に留学するが，翌 34 年の夏休みは，7 月にボーヴォワールとハンブルクで落ち合ったあと，ドイツ（リューベック，シュトラールズント，ベルリン，ポツダム，ドレスデン，ミュンヘン，ニュールンベルク，ロッテンブルク，ケーニヒス湖），オーストリア（インスブルック，ザルツブルク），プラハを回っている．各地の美術館を訪ねたり，オーバーアンマーガウの「キリスト受難劇」を見たりしている（cf. FA220-227／『女ざかり』上 179-182）点で，これも同様の教養旅行である．35 年の行き先はノルウエーで，さらに北部へと足を進めていることからも，必ずしも南にばかり惹かれていたわけではないことがわかる．

サルトルとボーヴォワールが再度イタリアを訪れるのは，1936 年夏のことだ．前回が北部中心だったのに対して，今度は南を中心に見て回っている．まずはローマで 10 日間過ごした後，ナポリとその周辺（ポンペイ，アマルフィ，ソレント，カプリ，パエストゥム）をゆっくりと探訪した後，シチリア（パレルモ，セリヌンテ）を巡り，メッシーナからナポリ，ロー

マ経由でヴェネツィアとじっくりと周遊している．ローマ以来の様々な歴史的建造物やギリシャ神殿の遺跡などに圧倒された点では，前回の旅行と変わらない（FA305-314／『女ざかり』上 248-255）．ただ，サルトルがなによりもイタリアの街に魅了されたこと，そして，ナポリ体験がきわめて強烈なものだったことは，当時の恋人オルガにナポリから送られた長文の手紙（邦訳にして二段組二七頁）に記された詳細な報告からも窺える．ナポリはそれまで訪れた北部の都市とは異なり，あまりに人間臭い街だったのだ．サルトルは，ナポリの不潔さに恐れをなしている．

> ナポリ人は知的ではない．彼らは趣味の良さとか悪さとかいう以下の存在である．彼らはショーウィンドーなり街路なりを目に快いものにしようとか整えようとか言うことは考えもしないらしい．　（LC68／『女たちへの手紙』72）

サルトルは，ポンペイのモザイクや壁画についての考察だけでなく，いや，それ以上に，ナポリ人について，食事について，街路の匂い，人びとの生き方について多くを語り，イタリア北部と南部の違いについて，バルコニーの存在からはじまり，気候，人柄などについて，事細かに報告している．この手紙にはすでに，後に現れる文明論の萌芽が見られるが，この体験をもとにして，サルトルは，ナポリを舞台にした「異郷にて（デペイズマン）」という短篇を書く[6]．最終的には短篇集『壁』に収録されなかったものの，一篇の作品を書かせるだけの強度を持ったこのナポリ体験がどのようなものだったかについては，後にナポリを検討する際に詳しく見ることにしたい．

翌 37 年，サルトルたちは，西洋文明のさらに深層をなすギリシャを目指すことになる．こうして，すでに欧州全体がきな臭い状況に入っている状況で，サルトルらの教養のための旅行は続く．戦争の予兆がひしひしと感じられる 38 年は，フランス植民地下のモロッコに赴き，39 年のヴァカンスは南仏のジュアン＝レ＝パンで過ごす．9 月，第二次世界大戦の勃発と同時に，サルトルは動員され，東部戦線で従軍，40 年 6 月に，フランス軍が潰走する際に捕虜となるも，翌 41 年春には偽造した書類で一般市民だと申し立て収容所から釈放され，パリに戻る．とはいえ，ドイツ占領下のパリでは，『存在と無』の執筆やレジスタンス活動などで忙しく，もちろん旅行どころではなかった．したがって，サルトルの国外旅行は戦後のこととなる．

1.2　第２期（1946–52 年）　戦争直後のイタリア人たちとの出会い

第二次世界大戦が終わり，実存主義の中心人物として一躍有名になったサルトルにとって，最も重要な外国は，幼少時からの憧れの地であったアメリカだった．45 年 1 月，サルトルはフランスの新聞記者団の一人として念願の渡米を果し，招待が終わった後も自費で 5 月まで滞在した．のみならず，さらに同年の 12 月 12 日から，アメリカで知り合った恋人ドローレス・ヴァネッティに会うために再び渡米，各地で講演会などを行うとともに，新大陸の文化に刺激を受けつつ，多くのアメリカ人やアメリカに亡命していたフランス人と交流し，ようやく 46 年 4 月に帰国する[7]．

サルトルが三度，イタリアを訪れるのは，その直後のことである．6 月，サルトルとボーヴォワールは，彼らの著作のイタリア語訳を刊行していた出版社ボンピアーニの招待を受ける形で，ミラノを訪れ講演を行うことになった．しかし，政治的な立場の違いや仏伊の政治状況の問題から，ボンピアーニとは訣別し，モンダドーリと契約することになる．モンダドーリは一家をあげてサルトルらを歓待し，サルトルらは，さらにヴェネツィア，フィレンツェ，ローマを訪れ，結局，二ヶ月ほどイタリアに留まることになった（FC, I 136-150／『或る戦後』上 105-115）．この時も，二人がイタリアの豊かな文化遺産に盛んに触れようとしているのは確かだ．ボーヴォワールは，マソリーノの壁画などを鑑賞したことを伝え，ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」が修復中で見られなかったことを嘆いている．とはいえ，この度のイタリア滞在は，戦前の貧乏旅行とはまったく異なるものであった．二人は実存主義の中心人物としてまさに売り出し中であったからだ．ローマでサルトルたちが逗留したのは 5 つ星のプラザ・ホテル，コルソ通りにある由緒ある豪奢なホテルである．

「私たちの部屋はコルソ通りのプラザ・ホテルに予約してあったが，そこはフランスの役人がみんな泊まるところだった．私はアルベルゴ・デル・ソーレが恋しかった」（FC, I 140／『或る戦後』上 108）とボーヴォワールは回想している．アルベルゴ・デル・ソーレとは，戦前の二回の旅行で二人が逗留したパンテオンの真向かいに位置するホテル．ローマで最も古いとされる旅籠だという触れ込みだが，値段的にはきわめて安い質素なホテルだった[8]．

待遇の変化はそれだけではなかった．彼らのためには，ローマのフランス大使館で晩餐会が催されたからである．したがって，この旅行は，むし

ろプロモーションを主たる目的とした作家のビジネス旅行の側面があったことは否めない．ただ，注目したいのは，この旅行の間に，彼らが各地で歓迎を受けだけでなく，多くの作家や知識人の知遇を得え，その後の人的交流の基礎が築かれたことである．当時のイタリアは，いわゆるネオリアリズモの全盛期であり，出会った作家の多くはほぼ同年代であり，サルトル自身すでに彼らの作品を読んでいたり，噂を聞いたりしていたこともあり，思想的にも近かった．アルベルト・モラヴィア，エリオ・ヴィットリーニ[9]，イニャツィオ・シローネ，カルロ・レーヴィなど左翼系の作家たちとの交流は，長きにわたって続くことになる[10]．これらのイタリア人たちは，フランス語をよくしたし，サルトル自身もイタリア語を学んだ[11]．

さらに9月末，サルトルは，ボーヴォワールとともに，ローマに再び赴く．イタリアの監督が『出口なし』の映画化を提案したためだったが，映画は結局実現することはなかった（FC, I 149-150／『或る戦後』上116）．

この旅行の収穫のひとつは，翌1947年に，サルトルが主宰する『現代』誌（8-9月，23・24合併号）の200頁に及ぶイタリア特集である[12]．アメリカ滞在後もサルトルは特集号を組んだが，同じ手法を用いて，イタリアの知識人たちとの絆を深めたのである．全体は，「批評」「戦争」「危機」の三部に分かれており，イタリアで知己を得た作家や知識人たちの論考が収められている[13]．巻頭緒言によれば，原稿の多くは，『現代』誌と共通性のあるイタリアの作家組織から提供されたものだが，イニャツィオ・シローネ，カルロ・レーヴィ，ロッシ・ドーリア，ブイスヌーズに関しては，直接託されたとしている．46年のイタリア旅行で作り上げたコネクションが，この特集号と密接に関わっていることは明らかであろう．

その後，実存主義の文字通り大立役者となったサルトルは，世界各地を駆け回ることになる．47年夏はボーヴォワールとスウェーデンを旅し，48年夏にはこれもボーヴォワールとアルジェリアを訪れる．49年夏にはアメリカの恋人ドローレス・ヴァネッティとメキシコ，グアテマラ，パナマ，ハイチ，キューバなどを訪れ，50年の夏はフランスに住みついたドローレスと南仏で過ごしたりしている．こうして，ふたたびイタリアに戻るのは1951年 のことになる．9月半ばから10月にかけて，サルトルはミシェル・ヴィアン（そして一部はジャック＝ロラン・ボスト）とともに，ヴェネツィア，ローマ，ナポリ，カプリを旅行した．この旅行はサルトルにとって大きな転換期になった．というのも，この時期，自らのイタリア体験を基に，ヴェネツィアやナポリを舞台にした文明論的なエッセー小説

ないしはイタリア紀行を構想したからである.

『アルブマルル女王あるいは最後の旅行者』[14] と名づけられたこの作品は，おそらくこの旅行中に書きはじめられ，翌 52 年 5 月から 6 月にかけての三週間のイタリア滞在のころまで断続的に執筆されたようだ[15]．現存するのは，ナポリ，カプリ，ヴェネツィア，ローマに関する断章であるが，結局は放棄されることになるとはいえ，多数の原稿が執筆された（一部は「ヴェネツィア，我が窓から」として発表[16]）．この放棄には様々な意味があると思われるが，この時を境に，イタリアはもはや語られるべき対象ではなくなったと言えるのではなかろうか．もはや，紀行文や文明論が問題ではなくなったのだ．じっさい，この文明論・紀行の放棄が，自伝『言葉』の執筆に繋がっていることはきわめて示唆的である．その意味は後に詳しく検討することにするが，この作品はイタリアを歴史と文明を客観的かつ主観的に捉えようとするものであり，「観光的ではない，より重要なイタリアを探求」（CA235／『別れの儀式』234）しようとするものであった.

1.3　第 3 期　政治的時期（1953–69 年）　執筆活動と講演

この時期のイタリア滞在を「政治的」のみと規定するのはやや恣意的であるかもしれないが，少なくとも，サルトルの人生において，50 年，60 年代は政治の時期であったことは間違いない.

このころから，夏の休暇を必ずローマで過ごすことになり，イタリアは完全にサルトルの生活のサイクルに組み込まれる．同時に，サルトルとイタリアとの関係がきわめて濃密になる時期でもある．観点を変えてみれば，それまであくまでも対象（objet）だったイタリアが，この時期になると，血肉化してゆき，作家の日常生活の舞台となるのだ．サルトルは，夏のローマ滞在の間に旺盛な執筆活動に没頭するだけでなく，イタリアの友人たち，さらにはイタリア人以外の人びとと足しげく交際するが，それが具体的な形で，サルトルの仕事に反映するのが，61 年と 64 年，二度にわたって行われたローマ講演である．その間の経緯を確認しておこう.

1952 年 8 月，当時，あまり上手とは言えないまでも運転に夢中であったボーヴォワールがハンドルを握り，二人は車で北はミラノからから南はシチリアまで，イタリアを縦断している.

クレモーナからタラントへ，バーリからエリーチェへ，私たちはイタリアを

再発見した．マントヴァの街と，マンテーニャの壁画，フェラーラの街の絵画，ラヴェンナ，ウルビーノの街とウッチェロの作品，アスコリのポポロ広場，プーリアの教会，マテラの穴居生活者，アルエロベッロのトゥルッリ，レッチェのバロックな美しさ，そしてシチリアではノートの美しさ．私たちはアグリジェントへも行った．セジェスタ，シラクーザも再訪した．アブルーッツォ地方も一巡した．（FC, II 11-13／『或る戦後』下6-7）

その年のイタリアは，連日 40 度を越える猛暑だったようだが，サルトルはこの強行軍をこなしながら『共産主義者と平和』の最終部分を執筆している．

1953 年 6 月はヴェネツィアに滞在．サルトルはミシェル・ヴィアンと，ボーヴォワールは恋人となって間もないクロード・ランズマンと一緒である．ときおりしも，アメリカではスパイ容疑で死刑を宣告されたローゼンバーグ夫妻の処刑日が近づき，世界がそれに注目していた．サルトルを含め，世界中の作家や知識人，さらにはローマ教皇までもが，冤罪に対して抗議の声を上げていた．しかし，6 月 19 日，夫妻は電気椅子で処刑された．サルトルは夜を徹して「狂犬病にかかった動物たち」と題する追悼文を執筆して，『リベラシオン』紙に電話で口述して送る．「ローゼンバーグ夫妻は死んだ．そして人生は続いている．君たちの望みどおりというわけだ．そうではないか[17)]」で始まる文は，アメリカ人ひとりひとりに向かってその責任を問いかける胸を打つものだ（FC, II 26-27／『或る戦後』下 18）．その後，7 月はローマに滞在して，ピエール・ブラスールから委嘱された『キーン』の翻案を「数週間で，大いに楽しみながら書き上げた」（FC, II 34／『或る戦後』下 23）．

1954 年夏，サルトルはミシェル・ヴィアンとローマに滞在，自伝を書きはじめる（FC, II 48／『或る戦後』下 34）のだが，イタリア共産党の指導者パルミーロ・トリアッティと知り合ったのは，この時期である．これまでもサルトルは，マリオ・アリカータやブランディネッリといった共産党系の知識人と親しく交わっていたが，トリアッティとの交友は後に見るようにきわめて重要である．ボーヴォワールの方はランズマンとスペイン旅行をしていて，その場に居合わせなかったものの，こう回想している．

彼はイタリアのコミュニストたちのひじょうに暖かい歓迎を受けた．トラステーヴェレ広場の野外レストランでトリアッティと夕食をとった．その店専属

の歌手は，イタリア共産党の党員証を得意げにトリアッティに見せ，彼のために古いローマ民謡を歌った．たいへんな人垣ができて，熱っぽくひしめきあった．しかし何人かのアメリカ人が口笛を鳴らして野次り，イタリア人が怒鳴りつけた．喧嘩騒ぎを避けるために，彼らはそこを逃げ出さねばならなかった．
（FC, II 48／『或る戦後』下34）

この出会いの様子をサルトルは後に，トリアッティの追悼文（後出）で詳しく語ることになるが，きわめて親密な交流が伝わってくるエピソードである．

この時期のイタリア共産党との付き合いに関しては，ボーヴォワールは，1956 年の夏ローマ滞在時の回想として次のように述べている．

私たちはときどきカルロ・レーヴィ，モラヴィア，コミュニストの画家グットゥーゾ，アリカータなどに会った．ローマの魅力のひとつは，私たちが戦後初めてここに来た1946年以来，左翼の団結がやぶれていないことだった．サルトルがフランスで実現しようとしたことが，ここにはちゃんと見出されたのである．（FC, II 108／『或る戦後』下82）

その翌年，1957 年 7 月のローマ，カプリの滞在に関しては，二人が仕事に没頭している様子を，ボーヴォワールは次のように報じている．

私はサルトルとともに一ヶ月以上もローマに滞在した．コミュニストの友人との行き来もなく，私たちはあまり人と会わなかったけれど，私はスペイン広場のそばのイギリス・ホテルが気に入ったし，仕事もよくできた．サルトルは『弁証法的理性批判』の骨休みをしようとしていた．彼はティントレットを見にヴェネツィアまで行ってきて，絵画論を書きはじめた．またゴルツの『裏切り者』のための序文も書いた．（FC, II 135／『或る戦後』下103-104）

じっさい，サルトルは，この間，ゴルツの『裏切り者』のための序文「ねずみと人間」を書き上げるとともに，ティントレット論の執筆に勤しんだ．なぜティントレットなのか？　サルトルは次のように述べている．

ティントレットが面白く思われたのは，彼の発展がヴェネツィアを通してなされたことだ．じつに重要だったフィレンツェやローマとは無関係にね．ぼく

はフィレンツェ派の絵画よりもずっとヴェネツィア派の絵画が好きだ．そしてティントレットとは何者かということを説明することによって，ヴェネツィア派の絵画が何であるかを同時に説明することができた．（略）ティントレットはヴェネツィアそのものだ，彼はヴェネツィアを描いてはいないが．

（CA291／『別れの儀式』288）

つまり，それは単なる絵画論ではなく，芸術家とその環境との関係を考察する批評的伝記の試みだったと言える．じつは，このような問題設定は，その後，自伝『言葉』やフローベール論『家の馬鹿息子』に受け継がれるものである[18]．

翌 58 年は，6 月 14 日からミラノ，17 日からヴェネツィア，そして 7 月 4 日にはローマへと移動しながら，サルトルは，戯曲『アルトナの幽閉者』，そして，後期の主著であり 750 ページに及ぶ大著『弁証法的理性批判』の執筆など，旺盛な活動を続けている[19]．

1959 年夏もローマ，ヴェネツィアに滞在し，『アルトナの幽閉者』を完成するといった具合だ．このように，サルトルにとって，もはやヴェネツィアやローマは観光の対象ではなくなっている．サン・マルコ広場やナヴォーナ広場のカフェは，彼らにとってサン＝ジェルマンやモンパルナス界隈のカフェとまったく変わらない．いや，煩瑣なパリでの人間関係がないだけ，いっそう自由でくつろげる場所になったように思われる．

1960 年には，恒例となっていたイタリア滞在はない．きわめて多忙に世界各地を飛び回っていたためである．2 月から 3 月にかけてはキューバを訪問し，カストロやチェ・ゲバラと会見し，5 月にはユーゴスラヴィア作家会議に招かれ数日ベルグラードに滞在，チトーと会い，8 月から 10 月はブラジルへ赴き，その帰路，月末からは数日間キューバを再訪するなど，革命の可能性や実態を見聞するとともに，それらについて縦横に語っていたサルトルは，ゆっくりと休暇を取る間もなかった．

それに対して，61 年は，ローマにおいて重要な催しが行われている．12 月，サルトルを囲むシンポジウムが行われたからである．「主体性とマルクス主義（Soggettività e marxismo）」と題されたシンポジウムは，グラムシ研究所の主催により，イタリア共産党本部もあったローマの Via delle Botteghe Oscure 通りで，12，13，14 日と三日間にわたって行われた[20]．これは前年に刊行されたサルトルの『弁証法的理性批判』を受け，あらためてサルトル思想とマルクス主義の接点と相違点を確認することを目的と

したものだった．討論会の参加者たちとサルトルは以前から親しい付き合いをしてきた仲であり，お互いの思想的立場にかなりの隔たりこそあるものの，討議がきわめて和やかな雰囲気のなかで進んでいく様子が記録からも読み取れる[21]．

この講演が行われることになった経緯について，ボーヴォワールは，1961 年夏のローマ滞在中の出来事として次のように証言している．

> 私たちはトラステーヴェレでアリカータとブランディネッリと夕食をとった．ブランディネッリは46年のときと同じように感じがよかった．グラムシ研究所が来春，イタリアのマルクス主義者たちとサルトルとの討論会を開催し，主体性と，資本主義陣営の新しい戦術がフランスおよびイタリアで引きおこしている諸問題を主題にしたい，という話が出た．
>
> （FC, II 428／『或る戦後』下326）

ここで，来春とされている計画が，前倒しされ 12 月に実現することになったのである．

さて，この夏のローマ滞在の他の重要な出来事は，フランツ・ファノンとの出会い，そしてメルロ＝ポンティ追悼文の執筆であろう．病気治療のためにイタリア北部アバノに行く予定だったファノンがローマを経由して，サルトルに会いに来たときの，三日三晩続いたという彼らの会談の様子はボーヴォワールによって活写されている（FC, II 420-428／『或る戦後』下 319-325）．一方，サルトルは，前年に急逝したメルロ＝ポンティの追悼文を，たいへん苦労しながら執筆したという．1955 年以来，かつての盟友とは喧嘩別れ状態だったために，彼らの哲学的・政治的懸隔を想起することなしには，亡き友を悼む文章は書けなかったからだ．同じ時期に執筆した少年時代からの親友で夭折したポール・ニザンの『アデン・アラビア』新版への序文，ファノンの遺著『地に呪われたる者』の序文など，一連のテクストはきわめて自伝色が濃い．この点をどのように考えるべきであろうか．おそらく，サルトルにとってひとつの決算の時期がやってきたということであろう．サルトルは，52 年頃から執筆を開始していた自伝を，自己批判的な方向へと変更しつつあったことからも，その点は見てとれるように思われる．

つづく 1962 年も，イタリアではサルトルをめぐる重要なイベントが展開されている．ヴィトリオ・デ・シーカが『アルトナの幽閉者』を映画化

したほか，レオナルド・アウテーラとグレゴリオ・ロ・カシオ監督による短篇映画「人間サルトル（Uomo Sartre）」が制作されたのである．サルトル自身は，年末にもローマに滞在し，エウリピデスの『アルケースティス』をフェミニズム的観点から翻案することを構想する．

63 年 8 月，サルトルとボーヴォワールは，ソ連に招待され長く滞在した後，例年どおりローマに赴き，パンテオン裏のミネルヴァ・ホテルに滞在．サルトルは第三世界における革命の問題に関するエッセーなどを執筆．この年も車での遠出を行い，シエナ，ヴェネツィア，フィレンツェにも立ち寄っている．

64 年 5 月 23 日，サルトルは再びローマのグラムシ研究所で講演する．5 月 22 日から 25 日まで開かれた「道徳と社会（Morale e Società）」と題するシンポジウムの一環であったが，このテーマ自体が，きわめてサルトル的なものである．その意味で，サルトルとイタリア共産党の対話が 61 年以降も続いていたことの表れとも言える[22]．講演の全文は現在までのところ未公刊とはいえ，後期サルトルの倫理思想を理解するには不可欠なものとして，研究者たちによって重要視されるのも肯ける．さらに，この年にはマリオ・アリカータによってイタリアで独自に編集された論集『哲学者と政治（Il filosofo e la plitica）』も出版されている（cf. ES 395）．この論集にはフランスではまだ単行本化されていない論考が多数集められていて，イタリアでのサルトルの重要性を示している．創作活動に目を転じれば，7 月から 9 月までローマに滞在したサルトルは，エウリピデスの『トロイアの女たち』の翻案に没頭している．

イタリア共産党の指導者トリアッティが逝去したのは 8 月 29 日のことで，サルトルはすぐさま追悼文を執筆し，翌日の 8 月 30 日，「ウニタ」紙にイタリア語で発表された（10 月に，『現代』誌 221 号にフランス語版）．後に検討するように，これは単なる追悼文に留まるものではなく，サルトルが考える左翼思想のあり方を，イタリアをモデルに語るものである点で極めて重要なテクストである．

1965 年の夏は，イタリアを大洪水が見舞ったが，二人は例年どおりローマで過ごし，車でパリに戻る途中，ペルージャ，ボローニャ，パドヴァ，マントヴァ，ヴェローナ，クレモーナを再訪している（TCF243／『決算の時』上 227-228）

1966 年は，サルトルとボーヴォワールが 9 月から 10 月まで一ヶ月間ほど，日本を訪れた年だが，それでも，短期間ながらローマで過ごし

(TCF243／『決算の時』上 228)，カルロ・レーヴィのためのエッセー「独自普遍」を執筆している[23]．67 年は，ヴェネツィア，ローマ，そして，映画祭のために再びヴェネツィアに赴く．サルトルの短篇「壁」を映画化したセルジュ・ルーレの上映が映画祭であったからだ（TCF243-244／『決算の時』上 228-229）．

68 年もサルトルたちはローマで過ごしている．「その翌年と翌々年のふた夏は，私たちはローマを離れなかったし，ローマはかつてないほど楽しい町に思われた」（TCF246／『決算の時』231）とボーヴォワールは回想する．つまり，68 年 5 月の出来事も，サルトルたちのローマでの休日の習慣を変えることはなかったということになる．とはいえ，68 年 5 月の波及はローマにも見られたようで，5 月革命に関して，サルトルは 8 月ボローニャでインタビューに答え，「エスプレッソ」紙に掲載されている（ES 468）．また，政治談義も盛んにしたこともボーヴォワールは伝えている．

> その夏は，イタリアの友人たちと大いに話し合った．ロサッナ・ロッサンダは，もうイタリア共産党文化担当書記局員ではなくなっていた．今は理論的な研究に従事する暇があった．私たちは彼女と，5月の運動や，イタリアはじめ世界各地の学生運動について論じた．（略）69年の夏は，その前の年の夏とぴったり重なりあって，時々，私には両者を隔てる一年間が存在しなかったような気がした．それでもいくつかの変化は起こっていた．（略）私たちはロサッナ・ロッサンダとしじゅう会った．彼女は最近仲間といっしょに雑誌「イル・マニフェスト」を創刊したばかりだった．彼女は，大衆と党の組織との関係の問題を熱心に考えていたが，イタリア共産党は彼女の主張を正当でないと判断していた．彼女は追放されることを恐れていたし，実際に，その後しばらくして，彼女はその処分を受けたのである．（TCF248／『決算の時』上231-232）

また，ヴェネツィア映画祭のコンペティション形式に反対するイタリアの映画監督たちと座談会を行い，その内容は 8 月 21 日付けの「パエーゼ・セーラ」紙に掲載された（ES 469）だけでなく，同紙には 8 月 25 日付けにも，「ジャン＝ポール・サルトル，プラハ問題について語る」（ES 470）と題するインタビューが掲載されているように，休暇中と言いながらも，発言は続けている．

69 年夏は，ローマで 68 年 5 月の中心人物の一人であるダニエル・コン＝ベンディット，マルク・クラヴェッツ，フランソワ・ジョルジュなどと

会い，フランス左翼の複数の傾向を結集しようという計画を立てている（cf. OR XCII）．その一方で，『家の馬鹿息子』の執筆を続ける．

以上，見てきたように，サルトルとイタリアの思想界や知識人界との関係は緊密になっていたが，イタリア共産党との関係は，トリアッティの死後は疎遠になり，むしろ非主流派の左翼知識人たちとの交流が深まっていく．もう一方で，ローマがサルトルの重要な仕事場の一つとなったことも窺える．いずれにせよ，サルトルの政治および倫理思想の展開を考察するにあたっても，イタリアというトポスが外すことのできない重要なものであることが改めて確認できるように思われる．

1.4　第４期（1970–79 年）晩年　日常生活のひとこまとしてのイタリア

70 年以降もサルトルは，夏期休暇をローマで過ごすというカレンダーを律儀に続けることになる．ところが，この時期のサルトルは，ほとんど失明状態になってしまっただけでなく，体調が日増しに悪化し，車椅子での移動などを余儀なくされることになる時期なのである．にもかかわらず，それまでの習慣を変えることなく，最期の年までイタリアに赴くことをやめなかった．これはなんとも驚くべきことではなかろうか．もともと，フェラゴストと呼ばれる 8 月半ばのローマの暑気は凄まじく，ローマ市民たちがこぞって避暑に出かける時期だ．冷房付きのホテルを選んだとはいえ，病気を押してまで，ローマに行くことの意義はどこにあったのかと問いたくなる．さらに言えば，車椅子に乗ってまで，イタリアへと旅行するほどの執着のしかたには，火急の用事があるわけでもない以上，その意味を問わずにはおれないものである．

晩年のサルトルは，ボーヴォワール，養女のアルレット・エルカイム，ヴァンダ，リリアンヌ・シジェルといった女性たちと決まった曜日の決まった時間を過ごすという，超過密な愛人スケジュールをこなしていたのだが，休暇に関しても，またそれぞれの女性と過ごすために，ヴァカンス計画はきわめて綿密なもので，それをボーヴォワールが取り仕切っていた[24]．二週間はヴァンダとヴェネツィアやフィレンツェ，あるいはカプリで，夏の休暇の前半三週間はアルレットと南仏の彼女の別荘で，後半の一ヶ月は，ボーヴォワールと二人でローマに滞在するという具合であった[25]．そして，その間，ボーヴォワールの養女シルヴィーをはじめサルトル・ファ

ミリーの面々もそこに随時加わるので，不思議な「ごった煮」とも言える状況となる．とはいえ，それは言ってみれば，パリで展開される日常の延長線上にあった．60 年代半ばからのローマでの定宿は，アルベルゴ・ナツィオナーレという，ローマの中心部，イタリアの下院議会のあるモンテチトーリオ広場にあるホテルのテラスつきのスイートルームであった（TCF239／『決算の時』上 224）．

この時期に関しても，時系列を追って，イタリア滞在の様子を確認しておこう．

1970 年，ボーヴォワールと共にローマに滞在するが，その間，サビーナ地方やリエーティ，アクィラなどにも足を伸ばしている．

1971 年夏は，サルトル晩年の大作『家の馬鹿息子』の 1，2 巻が同時に刊行された年だが，まずはアルレットとスイスで三週間過ごしたサルトルは，その間に発作を起こす．これは，5 月に起こった高血圧と言語障害の発作の再発であった．それにもかかわらず，ローマでの休暇をあきらめず，発作がおさまると列車でローマにいるボーヴォワールに合流，定宿に落ち着く．その後は，『家の馬鹿息子』第三巻の校正をしただけでなく，ヴァンダとともにナポリにまで出かけ，ポンペイを再訪したりもしている（CA35-36／『別れの儀式』30-31）．

1972 年は 8 月 12 日，アルレットとオーストリアに小旅行した後，サルトルは列車でローマに赴き，ボーヴォワールと合流，いつものホテルに逗留する．この時期のサルトルはアルコールに溺れ気味だった，とボーヴォワールは辛辣に記す．

> こんなふうに自分から逃げようとするのは，自分の仕事に満足できないからではないか，と私は推測した．『家の馬鹿息子』の第四巻で，彼は『ボヴァリー夫人』研究をやるつもりなのだが，例によって新境地を拓きたがっている彼は，構造主義的方法を用いようとしていた．ところが彼は構造主義を好まなかった．（略）彼は考え，ノートを書き留めていたのだが，これからやろうとすることの全体像が持てず，熱が入らないのだった．（CA50-51／『別れの儀式』45）

それでも，二人はきわめて楽しい夏休みを，例年通り，おしゃべりをしたり，本を読んだり，音楽を聞いたりして，過したとボーヴォワールは締めくくっている．

1973 年は 7 月から車で，ジェノヴァ，ついでヴェローナ，さらには，

ヴェネツィアに赴き，そこでヴァンダと過ごす（ボーヴォワールもいたが，ホテルは別で，別行動）．8 月 16 日，飛行機でローマに赴き，定宿に逗留．ただ，ほとんど目が見えない状態で読み書きはできず，テラスでぼーっとしていることが多かったという．ボーヴォワールが，カルロ・レーヴィの網膜剥離を直した眼科医に診察を頼んだほど，サルトルの目の状態が悪化していただけでなく，尿失禁こそ治っていたものの，唇の麻痺はひどく，食事の際に食べ散らかす様子は見ていられないほどだったと言う．そういう状態になっても，ローマのホテルに滞在する意義とは何なのだろうか．それはもはや変更不可能なルーティン，普通の人が，夏のヴァカンスやクリスマス休暇に別荘に行ったり，親戚の家を訪れたりするのと同様の習慣だったのだろうか．

> 毎日きまった日課は私たちの気に入っていた．朝私はサルトルに本を読んであげる（この年読んだのは，フローベールの研究書，『現代』誌のチリ特集号，ル・ロワ・ラデリュの新著，日本に関するすばらしく興味深い二巻の書物，マチエスの『恐怖政治下の物価騰貴』）．（CA75／『別れの儀式』71）

この年は，61 年に行われたローマ講演（イタリア語）と，サルトルに関する論考が掲載された「アウト・アウト」誌の特集号が刊行された[26]．この時期のサルトルたちは，レリオ・バッソやロッサナ・ロサンダたちと相変わらず会っている（CA72-77／『別れの儀式』68-72）．

1974 年は 3 月半ばアルレットのジュナスの別荘に行った後，下旬からミラノに赴き，スカラ・ホテルに泊まり，その後ヴェネツィアのモナコ・ホテルに 4 月 2 日まで滞在している（CA91-92／『別れの儀式』88-89）が，ボーヴォワールは当時のサルトルの知力の減退をこう指摘している．

> 彼はその頭のよさを保っていたし，読む本に批評を下し，論じるのだった．ただ，彼はかなり早く会話を放棄してしまうし，問題を提起したり，着想を次々に述べたりすることはなかった．どんな次元のことにも，彼は大して関心を持たなかった．そのかわり，決まって繰り返されること，主義として守っている習慣には執着して，真の好みを，頑固な忠実さで置き換えているのだった．（CA92／『別れの儀式』89）

頑なに繰り返される習慣，それこそが晩年のサルトルのイタリア滞在の

理由なのだろうか.

その年の7月まず南仏ジュナスのアルレットの別荘で過ごした後，ヴァンダとともにフィレンツェに赴く．そこにスペインからボーヴォワールが合流，その後，ローマへ向かい，9月22日まで滞在した．この滞在で特筆すべきことと言えば，ボーヴォワールがテープレコーダーを使って，サルトルとの対話を録音したことであろう[27]（CA96-97／『別れの儀式』93-94）．これが『別れの儀式』に付録として収録された長大な「サルトルとの対話　1974年8月-9月」である．ボーヴォワールが主題別，そして出来事の時系列に沿って編集しているが，晩年のサルトルを知るためだけでなく，彼の創作の舞台裏や思想形成について知るための第一級の資料である．原書で400頁に及ぶ対話に収録されなかった部分も少なからずあると想定されるが，これほど長時間の対話の録音が可能だったのは，二人がローマにいたからにちがいない．すでに述べたように，パリでのサルトルは，複数の女性たちと小間切れの時間を過ごす日々であり，ボーヴォワールもそのなかでは必ずしも特権的な存在ではなかったからだ．それに対して，たっぷり一ヶ月間，ふたりだけで過ごすローマ滞在では，じっくりとサルトルの一生を回顧する時間があった．ボーヴォワールはこの時，サルトルの死がそう遠くないことを感じていたのかもしれない．それほど意識的ではなかったとしても，この機会を有効に使おうという作家根性が働いたことは間違いないだろう．結果として，われわれはたいへん貴重な情報を得ることができたと言える．

1975年は，例年とは予定を変え，ギリシャ旅行が主になった．「この年は新機軸を出すことにした．イタリアのかわりにギリシャへ行こう，と．このプランは大いにサルトルの気に入った」（CA110／『別れの儀式』107）とボーヴォワールは伝えている．とはいえ，サルトルは習慣を大幅に変えたわけではない．まずはアルレットのところで過ごしたあと，ヴァンダとローマに滞在しているからだ．ギリシャでは，アテネ，クレタ島，ロドス島などをめぐり，「サルトルは何から何まで楽しんだ」（CA112／『別れの儀式』108）という．

1976年夏，サルトルはアルレットとジュナス，ヴァンダとヴェネツィアで過ごした後，ボーヴォワール，シルヴィーとカプリ（クイシサナ・ホテル）で過ごす．その後，ナポリから車でローマの定宿に戻り，2週間滞在．ふだんならここで終わりというコースだが，その後，さらに一週間アテネに滞在する．サルトルお気に入りのギリシャ人女性メリーナに会うた

めだった.「サルトルは，昼間は私と，宵はメリーナと過ごした」とボーヴォワールは告げている（CA122-123／『別れの儀式』119-120）.

1977 年，サルトルの健康状態はさらに悪化しているが，それでも旅行は続く．3 月，ヴェネツィアで例年と同じホテルに逗留．しかし，医者からなるべく歩かないように進められているため，車椅子での移動.

> サルトルは，また来られたことに大喜びだった．しかし彼はほとんどホテルから出なかった．彼の好きなレストランへ行くだけでも，毎度辛い遠足になった．サン＝マルコ広場に出るのですら困難だった．天気も湿度が高くて雨模様だったのでカフェのテラスに座ることも，ほとんどできなかった.（略）彼は大部分の時間を自室で過ごした．私は彼に本を読んであげた．彼が午後眠るか，ラジオで音楽を聴いているときは，私はシルヴィーと外出した．それでもやはり彼は，帰路につく時，この滞在にとても満足だと言っていた.
>
> （CA131-132／『別れの儀式』128）

ここまでして，ヴェネツィアに行くこの執念とはいったい何なのか．飛行機やモーターボートを乗り継いで，その後はホテルから出ることもままならず，部屋に留まるためだけに行くほど，ヴェネツィアは価値のある場所なのだろうか.

同じ年の 7 月にも，サルトルはまずはジュナスのアルレットの家に行き，その後，ヴァンダとヴェネツィアで二週間を過ごし，ボーヴォワールに迎えに来てもらい，フィレンツェに立ち寄った後に，ローマへ．その年はあいにく定宿のホテルのテラスありは使えず，別の部屋だったが，一ヶ月以上過ごすことになる（CA134-135／『別れの儀式』131-132）.

1978 年 2 月にサルトルはアルレットとベニー・レヴィとともに，エルサレムに行き，イスラエル人やパレスチナ人と会っているが，これはいわば仕事の旅行だ（CA139／『別れの儀式』137）．一方，復活祭は，いつもとは趣向を変えて，ブレーシア県はガルダ湖畔の美しい小さな町シルミオーネで過ごす.「私たちはヴェネツィアには少し飽きていた」（CA141／『別れの儀式』139）とボーヴォワールは説明するのだが，それでもやはりイタリア，ヴェネツィアからほど遠からぬ町である．しかも，市内は車の乗り入れ禁止と，サルトルにとっては（というか，周りの世話をする人びとにとって，というべきか），かなり不便な場所である．そして，夏はやはりローマ.「他の年と同様，私はシルヴィーとのスウェーデン旅行のあと，

ローマでサルトルと落ち合って，実に幸福な六週間を過ごした」とボーヴォワールは恬淡として記すのだ（CA142／『別れの儀式』139-140）．

そして，遂に最後の年，1979年の夏もまたサルトルはローマで過ごす．

> 私たちはあのサン＝ピエトロ大聖堂が，時にまぶしいほどの白さ，時に幻のように霞む白さで正面に見える，私たちの部屋を見出して，いつもののどかな日々を取り戻した．（略）［クロード・］クールシェは，サルトルが上機嫌で陽気なのに唖然とした．彼はサルトルをよく知らなかったが，病気と失明で多少ともうちひしがれているだろう，と想像していたのに，生きる喜びに溢れた人物が目の前に現れたからだ．（略）私生活では，サルトルと話をした人びとは，彼の不抜のヴァイタリティに一驚するのだった．
>
> （CA147／『別れの儀式』144-145）

たしかに，失明し，身体がぼろぼろでまともに歩くこともおぼつかないのに，習慣を変えることなくローマの夏期休暇を諦めることのないサルトルの生命力には驚かざるを得ない．おそらくイタリアには，そのような活力を与えてくれる何かがあるのかもしれない．しかし，祖父母の地アルザスや，フランスの魅力溢れるどこかの地方ではなく，なぜローマに，イタリアにこれほどまでにこだわり続けたのか，その意味をわれわれは問う必要があるだろう．

ここまで見てきたようにサルトルのイタリア体験は，教養のための旅行から始まり，作家としてのプロモーション活動を経て，イタリアとのより深い人的交流へと深化し，さらには日常生活の一部となり，重要な仕事場であると同時に，交際の拠点，さらには憩いの場所と変わっていく．その変遷を通じて，作品に占めるイタリアの位置づけも少しずつ変化していく．その内容と意義に関しては後に詳しく見ることにするが，ここでとりあえず簡単にまとめておけば，第1期の作品「異郷にて」で，イタリア（ナポリ）が描かれるべきロマネスクな対象であったことは，教養のための旅行というサルトルの姿勢と呼応していると言える．それに対して，第2期の『アルブマルル女王』においては，イタリアは単なる対象ではなくなり，客観的かつ主観的な考察の主題という位置づけに変わるのだが，これは人的交流が進み，イタリアとの関係が表面的ではなくなったことと平仄があっている．第3期の二つのローマ講演では，さらにイタリア人たちとの

人的交流のもとで，独自的普遍としてのイタリアが，サルトルの思想の背景に見えるように思われる．第４期は，もはやイタリアは，サルトルの人生の一部であり，パリについてサルトルがほとんど語ることがないように，ローマやヴェネツィアについても主題的に語ることはなくなるのである．しかし，やや分析を先走りすぎた．まずは次章で，サルトルが親しく交流したイタリアの作家，知識人たちがどのような人びとだったのかを見ることにしたい．（以下，続く）

参考文献　および　略号

Jean-Paul Sartre

OR : *Œuvres romanesques*, édition établie par M. Contat et M. Rybalka avec la collaboration de G. Idt et de G. H. Bauer, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1981.

MAEA : *Les Mots dans Les Mots et autres écrits autobiographiques*, sous la direction de Jean-François Louette, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2010.

LC : *Lettres au Castor et à quelques autres*, tome 1, Gallimard, 1983.『女たちへの手紙――サルトル書簡集 1』朝吹三吉・二宮フサ・海老坂武訳 1985，『ボーヴォワールへの手紙――サルトル書簡集 2』二宮フサ・海老坂武・西永良成訳 1988.

Qu'est-ce que la subjectivité, édition établie et préfacée par Michel Kail et Raoul Kirchmayr, Les Prairies ordinaires, coll. « Essais », 2013.『主体性とは何か？』（澤田直・水野浩二訳）白水社，2015 年.

Simone de Beauvoir

FA : *La force de l'âge*, Gallimard, 1960, coll. « Folio », 1988.『女ざかり』上・下（朝吹登美子・二宮フサ訳），紀伊國屋書店，1963 年.

FC : *La Force des choses*, Gallimard, 1963, coll. « Folio », 1988, 2 vols.『或る戦後』上・下（朝吹登美子・二宮フサ訳），紀伊國屋書店，1965 年.

TCF : *Tout compte fait*, Gallimard，1972.『決算の時』上・下（朝吹三吉・二宮フサ訳）紀伊國屋書店，1973，1974 年.

CA : *La cérémonie des adieux, suivi de Entretiens avec Jean-Paul Sartre* août-septembre 1974, Gallimard, 1981. ボーヴォワール『別れの儀式』（朝吹三吉・二宮フサ・海老坂武訳）人文書院，1983 年.

その他
ES : Michel Contat & Michel Rybalka, *Les Ecrits de Sartre*, Gallimard, 1970.
鈴木道彦・海老坂武・浦野衣子『サルトルとその時代――綜合著作年譜』人文書院，1971 年.
Annie Cohen-Solal, *Sartre 1905-1980*, Gallimard, 1985. アニー・コーエン＝ソラル『サルトル伝　1905-1980』（石崎晴己訳）藤原書店，2015 年.
DS : François Noudelmann & Gilles Philippe (éd), *Dictionnaire Sartre*, Honoré Champion, 2004.

注

1) 数少ない研究のひとつに黒川学の一連の論考がある.「旅行者サルトル～イタリア紀行をめぐって～」『帝京大学外国語外国文学論集』第 1 号，1994 年，p. 101-115. イタリア人によるものとしては以下のものがある. Sandra Teroni, Ornella Pompeo Faracovi, *Sartre e l'Italia*, Belforte editore libraio, 1987. Giovanni Invitto, « Sartre et l'Italie », *Les Temps Modernes*, a.46, oct.-déc. 1990, n.531-533 : Témoins de Sartre, v. II, pp. 1056-1071.

2) サルトルの伝記的事実に関しては，ボーヴォワールの自伝四部作，アニー・コーエン＝ソラルの伝記，ミシェル・コンタ／ミシェル・リバルカによるサルトル書誌（ES）およびプレイヤード版（OR）の年譜などを参照して復元する. とはいえ，二次文献の情報源は基本的にすべて，ボーヴォワールの回想録である. 引用にあたっては，邦訳を用いているが，表記などを若干変更しているところもあることをお断りする. また，以下，出典を示す際，頻出する文献に関しては，略号の後に，原書／邦訳の順でページ数を記す.

3) サルトル自身，旅行を，1）冒険の旅行，2）教養のための旅行，3）政治的旅行という，三つのカテゴリーに分類しており，自分たちの旅行の多くが，2）ないしは3）であり，1）はしたことがないと述べている. cf. CA300-301／『別れの儀式』297-298.

4) その一方で，彼らは，その年ムッソリーニがローマで開催した「ファシスト展」に外国人旅行者を誘致するためのイタリア国鉄 70％割引のプロモーションを「何憚ることなく利用」（FA178／『女ざかり』上 142）もした.

5) ティントレットは，50 年以降に論考が構想されることになるが，『文学とは何か』のなかですでに，ティントレットについての言及があるのは，この旅行の反映であろう.

6) « Dépaysement », OR1537-1557.「異郷にて」は，オードリーという名の人物を主人公とした三人称小説. 内容的には，ナポリの路地を彷徨う旅行者の物語で，サルトルの経験に即していることは，明らかである. この作品は，一部が「Nourriture（糧）」という題名で，大幅に変更を施され（一人称体で）

1938年に『ヴェルヴ Verve』誌第4号に掲載された．サルトルがこの作品を短篇集に収録しなかったのは，失敗作と見なしたためであった．長らく未刊だったが，プレイヤード版の小説集に収録された．

7) サルトルとアメリカに関しては，別の場所で論じたことがある．「野営地と廃墟――ジャン＝ポール・サルトルの見たアメリカ」澤田直編『移動者の眼が露出させる光景――越境文学論』（弘学社，2014年）所収．

8) ボーヴォワールの記述を引いておこう．「私たちが泊まったパンテオン広場のホテルは，ガイドブックによれば，ローマでいちばん安いホテルだそうで，アルベルゴ・デル・ソーレといい，セルバンテスが住んだことがあるという」（CA178／『女ざかり』上143）

9) ヴィットリオーニは，戦後いち早く雑誌『ポリテクニコ』を立ち上げており，1945年に『現代』誌を創刊したサルトルとしては，イタリアにおける同志を見いだした気持ちであったことだろう．じっさい，『ポリテクニコ』誌は，46年7・8月号に「ジャン＝ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールへの質問（Alcune domande a Jean-Paul Sartre e a Simone de Beauvoir）」という短いが興味深いインタビューを掲載している（ES 150）．

10) その他には，映画監督のヴィットリオ・デ・シーカ，ジッロ・ポンテコルヴォ，ルキーノ・ヴィスコンティなど．

11) 「［スペインとはちがって］イタリアではなんとかやれた．ぼくはイタリア語を習いはじめていたから」（CA 300／『別れの儀式』297）

12) *Les Temps modernes*, n° 23-24, Août-Septembre.

13) 心覚えに，目次を記しておこう．

第一部「批評」

レーモ・カントーニ「観念論の独裁」，グイド・ピオヴェーネ「カトリック教会とファシズム」，ジャコモ・カントーニ「アントニオ・グラムシ」，アントニオ・グラムシ「ベネデット・クローチェに関する書簡」，セルジオ・ソルミ「ピエロ・ゴベッティ」，ピエロ・ゴベッティ「涙の大洪水」，カルロ・レーヴィ「血」．

第二部「戦争」

ジャコモ・デベネデッティ「1943年10月16日」，ジアイメ・ピントール「兄弟への手紙」，R・ビレンキ／M・キエーザ「チヴィテッラ・デッラ・キアーナの哀歌」，ドン・アンジェロ・ベッケーレ「5人の死刑囚との一夜」，ブルーノ・ファンチュラッチ「抑圧下のフィレンツェ」，アルヴァロ・グラナターティ「カリタの家で」，アルベルト・モラヴィア「豚小屋での9ヶ月」，ステファノ・テーラ「イタリア人兵士」

第三部「危機」

イニャツィオ・シローネ「知性の尊厳と知識人たちの下劣さ」，アルド・ガロッシ「解放以降の歴史意識」，フランコ・フォルティーニ「若き知識人の伝

記」，コッラド・アルヴァロ「間歇的な物語＝歴史」，ルチオ・ロンバルド・ラーディチェ「イタリアの指導階級」，ヴィッタリアーノ・ブランカーティ「治安人間に関する覚え書き」，マンリオ・ロッシ・ドーリア「イタリアの地方の状況」，ウーゴ・ヴィットリーニ「プーリア書簡」，ヴァスコ・プラトリーニ「フィレンツェ1947年」，ジャニーヌ・ブイスヌーズ「ローマの民（ポポロ）」.

14) 1991年に遺稿が編集公刊されたが，未邦訳．*La Reine Albemarle ou le dernier touriste, fragments*, texte établi et annoté par Arlette Elkaïm-Sartre, Gallimard, 1991. これは，後に，MAEAに再録された.

15) MAEA, p. 1492. その一方で，ボーヴォワールとの対話では，「1950年から59年のあいだ，ぼくは百ページくらい書いた．たぶん20ページはゴンドラに揺られながら」（CA235／『別れの儀式』233）と本人は述べている.

16) 共に『シチュアシオンⅣ』所収.

17) « Les Animaux malades de la rage », in ES 704-708.

18) 『言葉』の草稿の執筆が，この時期と重なっていることは偶然ではあるまい.

19) この期間に関しては，ボーヴォワールの『或る戦後』に，日記からの長い写しがあり，二人のヴァカンスの様子を詳細に知ることができる．（FC, II 183-208／『或る戦後』下 142-163）

20) 当時は，アルジェリア戦争の真っ最中で，このシンポジウムのさなか，13日の5時からは，イタリア反植民地委員会の主催の集会で，「フランスの民主主義とアルジェリア問題（Democrazia francese e problema algeriano）」と題する講演を行っている．この集会には，アルジェリアの指導者ブーラルーフも参加した.

21) 1961年のローマ講演は，死後刊行されている．*Qu'est-ce que la subjectivité*, édition établie et préfacée par Michel Kail et Raoul Kirchmayr, Les Prairies ordinaires, coll. « Essais », 2013. ジャン＝ポール・サルトル『主体性とは何か』（澤田直・水野浩二訳）白水社，2015年．その内容については，訳者解説を参照のこと.

22) cf. ES, 425, DS 317.

23) « L'Universel singulier » は，シチリアの雑誌 Galleria n° 3-6 にフランス語・イタリア語対訳の形で掲載された．cf. ES 456. レーヴィは，後に見るように，サルトルとイタリアを繋ぐ重要な作家の一人である.

24) アニー・コーエン＝ソラル『サルトル伝　1905-1980』（石崎晴己訳）藤原書店，下 p. 999.

25) そこに，後にはギリシャ人女性メリーナが加わった.

26) Aut-Aut 誌 136-137 合併号．この号は，Sartre dopo la « Critique »（『批判』以降のサルトル）と題された特集号であり，サルトルの講演および討論の一部（p. 133-158）だけでなく，エンゾ・パーチの「サルトルにおける否定（La

negazione in Sartre)」をはじめ，イタリアの研究者により計７本のサルトル論が寄せられている．しかし，講演から雑誌発表までのこの 10 年以上のタイムラグの理由は問われるべきであろう．

27) 「シルヴィーが私にテープレコーダーの扱い方を教えてくれたので，私は先にパリで話し合ったサルトルとの一連の対談を始めた．疲れ気味だったり，話が捗らなかったりした数日を別として，彼はこの仕事に熱心に取り組んだ」（CA97／『別れの儀式』94）．

本論文は，JSPS 研究費 15K02390（研究代表者，澤田直）の助成を受けたものであることを記し，感謝します．